

付録 「アート」と「福祉」の他者感覚

原田綾子

法人本部企画事業部ケアサービス推進課
自立生活支援員

美術大学で彫刻を専攻し、大学院では美術教育について学ぶ。卒業後の平成二九年四月、社会福祉法人グローリーに入職。企画事業部に配属となる。

ホームかなざわは、私の人生初めての「福祉現場」でした。というのも、私は今年度入職するより以前、ずっと美術を自分の専門として学んでいました。長らく美術の分野に身を置いてきたわけですが、ここではそんな私が「美術」から「福祉」という別の世界に足を踏み入れて感じた、両者のつながりのようなものについて、粗削りではありますが言葉にしてみようと思います。

私は、学生時代からの問題意識として、今の社会の中で「わかりやすい事」「すぐ役に立つ事」「明確な答えが用意されているもの」ばかりが求められがちではないかと感じてきました。作品の制作を行なっている中で、作品が表現している意味をわかりやすく説明することを求められることもしばしばありました。しかし、そもそも簡単に言語変

換できるのならば、極端に言ってしまうと作品を作る意味自体がなくなってしまうはず。

このような葛藤の中でしばらく悩むうちに、私は「わからない」ということそのものが即ち悪ではないと思うようになりました。なにより、私にとってのアートの面白さやその醍醐味みたいなものは、美術作品を持つこの「わかりえなさ」の方にこそあるからです。わからないものを無理矢理ねじ曲げて理解へ落とし込んだり、排他的に突っぱねてしまうのではなく、「わからないものをわからないままにしつつも、その対象と向き合おうとする姿勢」がアート体験全般にとつて必要なことではないかと考えました。つまり、逆説的ではありますが、「わからないことがわかる」ということがまず最初に重要だということです。更に、これは実際の生身の人間、つまり他者に対する理解の仕方にも通じているはずだと考えるに至りました。

そこから、もつともつと人と関わることをやってみてみたいという思いもあり、福祉の仕事に就くことを決めました。この度の報告書のインタビューも含め、入職して福祉に関わる色々な方とお会いしたり、お話ししたりする中で、先ほどの問題意識にもあった、「わからないものへの耐性」を福祉の仕事に就く多くの方がさも当たり前のように体得していると私は感じました。実際にはそれこそわからないけ

ど、少なくとも私の目にはそう映ったのです。「他者は完全には理解しえない存在である」ということが、わざわざ意識するまでもなく、ごく自然に前提となっていてと感じました。自分がかつて必死に問題提起しようとしていたことが、ここでは拍子抜けするくらい軽々と乗り越えられているように感じて、驚きました。

それを象徴する一つの例として、「見立て」という言葉があると思います。この「見立て」という語は、美術の世界でも割とよく使う言葉でもあります。たとえば、抽象画を見た時に「なんか雲に見えるなく」と感じた時、それは雲に見立てると言えると思います。これは非常にわかりやすい例ですが、つまり見立てというのは、何かを別のものに置き換えて考えてみるということです。そしてこの「見立て」という語が、こちらに来てからも使われているのを聞いて、おもしろいなと思いました。たとえば、ケース会議などでも、「見立てでは」と前置きして利用者さんの状態像を語ったりするのではないのでしょうか。

たとえば利用者のAさんがいた時に、まず「この人はどんな人だろう」と見立てます。関わっていく中で、色々な面が見えてきて、「いやいや、こういう人かもしれない」「こういう一面もある」「将来はこういう職業はどうだろう」「これなら喜んでくれるかな」などと、どんどん見立ての連続

で福祉の仕事は進んでいきます。「この人はこういう人だ！」と一〇〇%決めつけたりせず、手探りの中でも、相手を知ろうとする努力を止めないというのが、福祉の仕事であり、魅力であると思います。

そして、こういう「見立て」を行っていく根底には、相手が「不確かな人物像」であって、どこまでいっても相手を完全に理解しきることはない、というのが、前提としてあるのだと思います。このように「他者は本質的にはどこまでもわからない存在である」という他者感覚を、福祉職の多くの方が持っているように感じます。だからこそ、先述したわからないものへの耐性をごく自然に身につけているのだろうと推察します。

さいごに、これまでの話を「アート」につなげて考察してみたいと思います。近年、福祉発のアート事業が全国で活発ですが、それはなぜなのかと考えた時に、一つの可能性が私の中に浮かび上がりました。それは、福祉における「人」と「人」との関わり方や姿勢——つまり「他者は本質的にはどこまでもわからない存在である」というこの「他者感覚」が、ここでも「見立て」の力によって「もの」へと拡張して、必然的にアートへと開かれたのではないか、ということだと思います。ちなみに、美術においては「もの」が「人」に対して与える影響という視点から論じられることが多い

ですが、ここでは「人」の「人」に対する姿勢が「もの」にまで伝播しているように見えます。これがとても面白いと思いました。「なぜ社会福祉法人でアート活動をしているんだろう？」と学生時代には疑問でしたが、こう考えるとそれはとても自然なことのように感じました。きっと、多くの方が利用者の方に対する眼差しと同じ眼差しで作品を捉えているんだろうなあ、と思います。

アートを敬遠する人は多いですが、他者を一面的に捉えない、次々と見立てていく他者感覚の下地が福祉のスキルとしてあるからこそ、福祉とアートは親和性が高いのかもしれないなあ、と感づいています。別々の分野ではありますが、この他者感覚が求められるという点で二者は意外と近しいのかもしれないです。

このような気付きは、私にとって非常に新鮮でしたし、自分の考えを深めていく上で大きな示唆でもあるように思いました。今後も、この福祉の現場に身を置きながら、「人」と「人」との関係や「人」と「もの」との関係について、ずっと考えていきたいです。